

環境新聞

発行所 環境新聞社
東京本社 〆(03)3359-5371
〒160-0004 FAX(03)3351-1839
東京都新宿区四谷3-1-3
(第1高層ビル)
大阪支社 〆(06)6252-5895
〒541-0056 FAX(06)6252-5896
大阪府中央区久太郎町3-1-15
新規購読用 〆(0120)1972-65
https://www.kankyo-news.co.jp/
振替口座 00150-5-20286
年間購読料 29,700円(税込)
© 環境新聞社 2024

下水道展'24 東京特集

第1部

紙面内容

◇開催概要……………	10面	◇下水道の魅力伝える広報戦略―GKPP広報大賞	18面
◇開催に寄せて……………	11面	◇殿堂入りした堺市の取り組み	
◇下水汚泥の肥料利用……………	12面	◇全国初！産官連携によるマンホール	
◇豊富な海つくりと下水道……………	13面	◇アップサイクル実証事業……………	20面
◇下水道のエネルギー利用……………	14面	◇マンホールサミットが今年もやってくる……………	21面
◇豊かな海つくりと下水道……………	15面	◇写真で見る東京下水道……………	23面
◇下水道調査が拓く感染症対策の未来……………	24・25面	◇第61回下水道研究発表会……………	

鼎談 下水道展'24東京特集

下水道の仕事はもっと魅力的になる！ 異業種出身者だから気づけた伸びしろ

下水汚泥を肥料やエネルギーに活用したり、処理水を養殖に利用するなど、下水道には地域を元気にする資源が多く存在しますが、下水道業界の中にいるからこそ気づけていない可能性や魅力がまだまだ隠されているかもしれません。そこで、異業種からの転職者に集まってもらい、業界内にいるだけでは気づきにくい下水道業界のおもしろさややりがい、魅力、もっと魅力アップできる伸びしろなどについて議論してもらいました。

押川 隆昌氏

(フソウ エンジニアリング事業部技術本部設計部下水道課)

丹治 道子氏

(メタウォーター 経営企画本部人事総務企画室長兼人事勤務部長)

久田 友和氏

(NJS 管理本部事業戦略室グループ・リーダー)

進行 奥田早希子氏 (Water-n 代表理事)



押川 隆昌氏



丹治 道子氏



奥田早希子氏



久田 友和氏

だから「水業界」に転職しました！

押川 生物も機械も化学もあるからおもしろい

丹治 全く異なる業界で経験を生かしたい

久田 生きるのに必要なのはハコモノより上下水道

――まずはフソウの押川さんから 理由をお聞かせいただけますか。

押川 エンジニアリング会社で9年間勤め、原子力発電所の耐震解析に携わりました。その後、建設コンサルタントで5年間勤め、さらにフソウに転職して1年ほどが経ちました。

転職したのは、他業種のプラント設計に携わってみたいと思ったからです。

――転職先として、なぜ下水道を選んだのですか？

押川 火力発電所や化学プラント、焼却設備などいろいろ検討する中で、下水処理場に出会いました。漠然と水処理をする施設というイメージは持っていましたが、その役割をきちんと理解し、いかに重要なインフラであるかということ

を初めて知りました。それです。

さらに調べてみると、微生物を使って水処理をしていたり、機械もありますし、化学も必要ですし、電機も設備もたくさんあって、これはおもしろいと感じました(写真1)。

――メタウォーターの丹治さんはいかがですか？

丹治 前職は商社です。30年以上のビジネスパーソン人生は人事畑一筋で、勤め先も一社だけだったので、残り数年間の会社人生を全く異なる業界で人事を経験したいと思ったのが転職のきっかけです。

商社の仕事はインフラを支えている側面がありますので、転職先としてはインフラ関連やサステナビリティに取り組んでいる会社

にチャレンジしている会社を探していました。そこで転職エージェンツから紹介されたのがメタウォーターで、2020年4月に入社しました。

――メタウォーターは知っていましたか？

丹治 社会が知りませんでしたが、そこでチームベージュを調べてみたところ、日本の水・環境インフラを支えていると同時に、海外でも事業展開している。これから水資源は非常に重要で、それを国内外でしっかりと支えるには意義がありますし、企業理念にも共感しました。

また、人事面では前職で実現できなかった週休3日制を導入していたり、コロナ禍即ちテレワークも取り入れている。それほど天気の会社ではないことをこまめに

入社して9年間ほどは建築設計を担当していたのですが、もっと顧客に近い仕事がしたいと思い、PFI事業を専門とする社内組織「民間活力研究所」(以下、研究所)に異動させてもらいました。

職種も変わったので、技術を知った営業として、技術部門と営業部門の両方に口を出すマルチプレイヤーの動きをすることになりました。

――NJSの久田さんはいかが導入されています。研究所で上下

でしょうか。

久田 前職は大和リースという会社に勤めていました。大和ハウスの子会社で、被災地の応急仮設住宅やプレハブの建設がメイン事業で、そこから波及して学校、庁舎などの公共施設、事務所や商業施設などの民間建築、PPP/PFIやPark PFI、さらには商業施設の開発・運営、緑化や自動車リース、PPAなどのエネルギー関連事業なども手掛けている企業です。

入社して9年間ほどは建築設計を担当していたのですが、もっと顧客に近い仕事がしたいと思い、PFI事業を専門とする社内組織「民間活力研究所」(以下、研究所)に異動させてもらいました。職種も変わったので、技術を知った営業として、技術部門と営業部門の両方に口を出すマルチプレイヤーの動きをすることになりました。

――下水道事業にもPFIが導入されています。研究所で上下

水道PFIを経験されたのですか？

久田 「地上」の大きなハコモノの公共施設が中心で、PFIの代表企業として、大手設計事務所やスパーゼンコン、維持管理企業や運営企業等をまとめあげ、代表企業のプロジェクトリーダーを担っていました。「地下」の上下水道は経験しませんでした。その代わりと言っては何ですが、NJSに転職してからも縁が続いている、岩手県大船渡市の賑わいづくりに関わらせていただいています。

大和リースはそれまでも応急復旧には携わっていましたが、復興には携わっていませんでした。だから、東日本大震災ではここにチャレンジしたかったんです。私は関西の出身で、阪神・淡路大震災の時は15歳で何もできなかった。次に何かあればやらなければならないという使命感もあって、復興担当に名乗りを上げました。

最初に大船渡市に入ったのは2014年、地元の方からヨソモノ扱いで受け入れてもらえませんでした。阪神・淡路大震災で抱いた使命感を訴え、こころを込めてほしいという熱意が通じ、同じ復興を自覚する同志として迎え入れていただき、復興の大きな節目となる商業施設の開業までの3年間携わらせていただきました。

研究所に戻ってからは再び公共施設の建設に関するPFI事業を担当したのですが、人口が減少する中で大型のハコモノを作り続けていいのかと考えるようになりました。水インフラも含めた公共インフラの老朽化が問題視されるようになった頃です。

極端なことを言うと大きな文化施設がなくとも生きていけますが、水インフラがないと生きていけない。まづつくりの経験やノウハウを上下水道業界で生かせるならチャレンジしたい。そう考えました。NJSには22年に入社しました。

――ところで、丹治さんはメタウォーターがそれほど大きな規模ではないとおっしゃっていましたが、水業界では割と大きな会社だと思いませんか(笑)。丹治さんの前職はかなり大きな会社だったのですか。

丹治 そうですね。メタウォーターの社員数は単体で約2千人、連結で約3千人くらいですが、前職は単体で6千人規模でした。(8面に続く)

鼎談・下水道展'24東京特集

「いかに伸びしろあり！」

丹治 海外人材の育成が飛躍の鍵 久田 水とまちづくりで地域活性化を

「皆さんが所属される会社にあるいは下水道業界において、異業種だから分かるという伸びしろについてお聞かせください。」

丹治 前職の商社はグローバル展開しており、海外赴任や留学制度など海外を切り口にした人事の事も多かったのですが、それに比べればメタウォーターの海外展開はまだこれから。研修制度や海外赴任の仕組みなども整備していく必要があります。そこが伸び代です。（写真4）

日本では少子高齢化による人口減少が進み、水・環境インフラの拡大は期待できません。そうした中で海外事業を伸ばすことは重要であり、その鍵を握るのが海外人材の育成だと考えています。

ICTの進歩で語学力が以前ほど重要ではなくなっていますが、海外での暮らしに心理的に抵抗を持たず、いろんな国籍の社員を束ねてマネジメントする力を若いうちから身に付け、海外で会社を運営できる社員を早めに育てておかねといけません。その面でも前職の経験を役立てていきたいです。

海外人材というのは、外国籍のマネジメント層ですか。それとも海外でマネジメントできる日本人の育成ですか。

本国籍の社員のことでしょうか。丹治 現在、海外のグループ会社で経営層、日本からも非常勤役員を置くようにしているのですが、その人材がもっと必要です。海外でマネジメントできる日本人社員を育てることが優先課題です。

将来的には海外の人材を日本に迎えることもあるでしょう。そうなれば、もっとおもしろいグローバルな会社に成長できると思います。

丹治さんの経験が、さまざまな場面で生かされそうです。続いて押川さんはいかがでしょう。



写真4 「海外展開にはまだまだ伸びしろがあります」（メタウォーターの丹治さん。写真は海外法人のミーティングの様子）

うか。伸び代を伸ばすためにキャリアを生かしたい、あるいは生かせると思うことをお聞かせください。

押川 厚みのある耐震解析で求められた高い品質と緻密さを、下水処理場の品質管理にも生かしていきたいと考えています。スピード感とのバランスが必要ですが、品質管理の立場で地域を見回すことで、フウの経営理念である志、お客さまが喜ぶことを追求し、持続可能な社会を追求することにつながり、地域課題に対して最適なソリューションを提案できるのではないかと考えています。

地域課題を知ること、の会社も大切にされていますね。押川さんが心がけていることはありますか。

押川 下水道のプラント設計は、地域ごとの特色を踏まえて発注者、自治体の要望や思いを的確に反映するものだと思います。その思いは仕様書の中にうつっています。その思いをくみ取ることで、そのために発注者がコミュニケーションをしっかりとるよう心がけています。維持管理業者からも困りごとを聞くようにしています。さらにフウでは設計や施工段階で積極的にP・M・C・Mを活用しており、完成形のイメージを共有することで関係者間のコミュニケーションや合意形成に役立てています。いちはやくデジタル化に取り組み、ノウハウや実績もあるため、業界全体の課題解決や下水道の価値向上に貢献している会社だと思っています。



写真5 久田さんは「これまでのNJSでは考えられなかった」まちづくりにチャレンジする（隠岐の島町での地域の方々とのまちづくり勉強会の様子。写真中央が久田さん）

するだけでもいいのかもしれないが、やはり現状の課題を一つでも多く解決したいですから。それが押川さんの言う「高品質を求める」ということなんですね。素晴らしいです。

久田さんはいかがでしょう。久田 まちづくりの経験や人脈が、NJSでの事業につながっています。

復興まちづくりに携わった大船渡市では、地域ライターの育成する「まちおしAWARD」という事業を展開しています（図）。地域新聞にも取り上げていただけで、会社のPRにもつながりました。

そのほか大船渡市のつながりで、島根県隠岐の島町にある西郷港周辺のまちづくり業務にも携わることができています（写真5）。

これまでのNJSでは考えられなかったことです。

これは上下水道事業がメインではありませんが、まちづくりの中に上下水道をはじめとする水インフラの要素を取り入れるように心がけています。入社時に思い描いていた全てができていくわけではありませんが、少しずつ近い動きはできつつあると自負しています。



図 NJSでは久田さんの経験と人脈を生かして大船渡市で地域ライターを育成する「まちおしAWARD」を展開する。

「とはいえ上下水道コンサルタント会社であるNJSでは、まちづくりは異業種だと思います。久田さんの仕事は社内でのように受け止められているのですか。」
久田 最初は違和感があったかもしれませんが、徐々に理解者が増えました。私自身も上下水道事業とまちづくりのかけ合わせで何ができるのか、どのようにしてシンジを生み出すのか、検討を重ねました。イメージを図にしたものや部署の考えや方向性を社内資料に掲載してもらったり、私の前職での取り組みや現在の取り組み等を社内広報にも掲載してもらいました。少しずつではありますが、市民権を得つつあります（笑）。

そのかいあって、上下水道関係の仕事だけでなくまちづくりの要素も取り入れたいから相談に乗ってほしい、と声をかけてもらうこともあります。その点では前職の経験をフルに生かしていますね。

最近、過疎地や山間部の集落で高齢化が進み、飲み水をくんでいた井戸を管理する人がいなくなっている地域が増えています。そのような地域課題の解決方法として、まちづくり会社のあり方を参考にして、地域企業も交えた管理会社の設立を提案したり、まちづくり系の補助金を紹介したりすることもあります。

地域コミュニティを継続させるためにも、このような事例は今後増えていくことが予想されます。

——地域のコミュニティデザインも、まちづくりの経験が生かせる分野ですね。

久田 そうなんです。水とまちづくりの双方から地域活性化を提案していきたいですね。下水道や下水道の課題解決に加えて、地域経営の視点やにぎわいの創出、産業活性化なども考えていきたいです。

異業種が考える魅力向上策

丹治 業界全体で知名度向上を 押川 機械大好き人間にアピールを

最後に上下水道業界をもっと魅力的にするヒントをお聞かせください。

丹治 冒頭で申し上げたように、これは社会的意義のある仕事をしているにもかかわらず、メタウォーターという会社も、上下水道業界もよく知りませんでした。業界全体でも知名度を上げていくべきではないでしょうか。

このままでは未来を担う人材を確保できません。技術者を育成できません。学生に就職したい異業種を聞いたときに、上下水道業界は出てくるでしょうか。同じように業界であれば電気、ガスは出るでしょうが、水業界が真っ先に目につくようにならないと、上下水道業界の役割は大きいはず。それを広PRするために、工夫の余地はまだあります。本日に当たっては、このことは転職した初日から思っていました。

久田 上下水道業界が中心になって、建設業界などいろんな業界を巻き込んでいきたいですね。異業種間のイメージで、地域全体を対等にするような仕事ができ

久田 上下水道の余熱利用もその一つ。下水道のポテンシャルをもっと生かし、それが地域に響き、地域が元気になってい

く。上下水道業界が異業種を束ねる指揮者になれればいいですね。—— 地上の施設と地下の施設が仲良くなれば、もっと楽しいことができると思います。ぜひ久田さんが指揮者になってください。

押川 今ほどの業界も人手不足で人材確保の争奪戦が激しくなっています。異業種への転職はハードルが高いと感じる方もいるので、異業種の設計者でも活躍しやすいと思います。また、異業種であっても基本的な設計の知識や経験があれば、下水道に応用できると感じています。ぜひ躊躇せず、上下水道業界にチャレンジしてほしいです。

人間にとっては、下水道施設ってとにかく本当におもしろいんですよ。もともと工場跡地であったんですが、下水処理場もまさにそう。大・小さまざまな機械や配管、銅製加工品等が詰まっています。無茶苦茶おもしろい。そのことをもっともっと多くの機械好き人間に知ってもらいたいです。

—— いろいろな人に関与してもらうことが下水道業界の魅力向上につながります。ひいては地域の元氣にもつながります。異業種から転職された皆様をきっかけに業界がよい方向に変わっていくことばちうんですが、さらに異業種からの転職が増えること、そして異業種との協働が増えることを期待しています。本日はありがとうございました。